

〔嬉遊笑覽服二中〕箕山大鑑に楊枝は、略中皮付のやうじ。凡卑なり、

〔大和本草雜木十二〕黒モジ 山中ニ生ズ、葉ハ漆ニ似テ又榎ニ似タリ、葉ニ大小ノ異アリ、冬ハ葉落ツ、

皮黒クシテ香氣アリ、故ニ是ヲ用テ牙杖トス、皮ヲツケ用ユ、又ホヤウジト名ヅク、

〔嬉遊笑覽服二中〕大和本草にほやうじとあるは、黒もじの皮付にて、草の穂に似たるをもていふ

にや、これ又たけ長きにて、今の爪やうじをいふにあらず、

〔嬉遊笑覽服二中〕爪楊枝は、八文舎が色三線に、浮世男をこぎくの五つ折、爪楊枝を指こみ云々とあ

れば、此頃は小き楊枝も出来て、壺打などは懐中にもたざりしにや、

〔嬉遊笑覽服二中〕寸法、人の好みによりて用ゆるにや、略中近きころ年問迄も、今のごとき小きや

うじはなかりき、

〔男色大鑑七〕袖も通さぬ形見の衣

猿に袴を着て看板出し、夷橋筋に根本浮世楊枝とて、芝居若衆の定紋をうちつけ置しに、それぞ

れのおもはく其子に枕のかたらひ及びがたき人、せめては心晴しに、此紋やうじを手にふれて、

口中琢ける時は、戀の君が美舌をくはふる心ちのして、哀や氣をなやましぬ、

〔嬉遊笑覽服二中〕西鶴大鑑にえびす橋筋に、根本浮世楊枝とし、芝居若衆の定紋をうちつけ置し

に云々とあり、其頃の俳諧集に、野郎の紋やうじ付合の句往々見えたるよし、柳亭子種いへ

り、思ふに紋の模を作り、楊の木の軟なれば、その模を打たるものと見ゆ、

〔懷子伽戀十上〕花もしにふるまふ網の鯉一種

重頼

立よりてこそ三輪の杉の木

初瀬女をもてなす茶の子そぎ楊枝

なじまぬ中もふかき心中